

「気候変動」

東城 文柄

近年「気候変動」が特に大きな関心と注目を集めている。二〇二三年夏は異常高温と火災が世界各地で大きくフォークスされた。災害疫学研究センター（CREED）が二〇二三年に発表した自然災害発生件数に関する統計資料によれば、特に二〇〇〇年代以降、件数を大きく伸ばしてきたのは洪水災害であり、二〇二一年時点における自然災害総数に対する洪水数の比率は五〇パーセント以上に達している。気候変動が引き起こす問題の大半は洪水の問題、より正確に言えば雨の「降り方」の問題である。バングラデシュを含めた南アジアにおいては、年間降水量の七〇パーセントを超える雨（モンスーン）が七月から九月のわずか三カ月間に降る。そして世界人口の約四分の一に相当する南アジアの人口の六〇パーセントは、この降水に依存して生きている。このように南アジアでは、「水」の恩恵と災厄との格闘が人間の生活を支え、歴史を形作ってきた（スニール

二〇二二年）。そして気候変動が引き起こす雨の「降り方」の揺らぎは、南アジアの大半の人々に直接的な影響を与える。気候変動問題は、バングラデシュに限らず南アジア全体にとっても、国や地域の在り方を左右する大きな問題であることは間違いない。

バングラデシュの国土の大部分は、ベンガルデルタと呼ばれる世界で有数の巨大な氾濫原で占められている。ベンガルデルタはヒマラヤ山脈に源流を持つガンジス川・ブラマプトラ川の両水系により形作られ、ベンガル湾を endpoint とする東西約四〇〇キロメートル、南北約五六〇キロメートルの領域に広がっている。この地理条件から、バングラデシュは洪水とサイクロンに頻繁に見舞われてきた（大橋ら二〇一七年）。バングラデシュの氾濫原の開拓は一二世紀前後から進み、一九世紀以前には氾濫原のほぼ全域で定住が確認されている。これらの氾濫原には、度重なる洪水と河

川流路の変化によって自然堤防が網目状に形成されていた。長い年月をかけて、人々がこうした自然堤防上の微高地に土盛りし、その上に屋敷地と集落をつなぐ道路を築きつつ、氾濫原の開拓を拡大していった（宮本ら二〇一四年）。このため雨季に衛星画像でこの国を観察すると、屋敷地と道路以外の大半の土地が冠水した、信じがたいほど大きなスケールの自然を目にすることができる。

気候変動に伴う洪水災害のリスクの四五パーセントは、地理的には南アジアに集中している。バングラデシュは上述した地理と地形により、洪水災害に特に脆弱である。近年バングラデシュでは、「気候（変動）難民」という言葉が現地の報道を賑わすことが多くなった。「毎年平均七〇万人のバングラデシュ人が洪水により避難を余儀なくされ、首都ダッカのスラム人口の最大七〇パーセントは洪水に起因した農村人口の流入に起因している」（ナショナル・ジオグラフィックによる二〇一九年のある報道）といったように、これらの報道だけを見ると、気候変動に直面してバングラデシュの行く末はただただ悲観的に思えてくる。しかしながら、バングラデシュは歴史的に洪水とともにあった地域である。そしてこの地域は、周期的な洪水災害を避けつつも、水位上昇期から利水するなどして「恵み」を引き出すと対応（適応）してきた歴史がある。そうした人々の

営みの積み重ねを通して、ベンガルデルタの自然と暮らしは文字通り形作られてきた。ある程度の気候変動が避け得ない未来となった現代においては、気候変動対策においては「緩和」に加えて「適応」への関心が日に日に増している。特に「洪水」に関する対策としては、近代科学技術の発展とともに「災害」として「制御」することのみに偏重し、「適応」という観点が抜け落ちてきた。近年気候変動に対する「適応」の議論においては、EbA（生態系を活用した適応策）といったアプローチも注目されるようになってきている。バングラデシュにおける洪水と人々の関わりが今後どうなっていくのかを注視していくことは、気候変動への人類の「適応」を考える上でも重要な試金石のひとつとなっていくのではないだろうか。

とうじょう・ぶんべい 世界言語社会教育センター准教授 地域研究

文献案内

スニール・アムリス『水の大陸アジア——ヒマラヤ水系・大河・海洋・モンスーンとアジアの近現代』秋山勝訳、草思社、二〇二二年
大橋正明他編『バングラデシュを知るための66章』明石書店、二〇一七年
宮本真二他編『ネイチャー・アンド・ソサエティ研究 第一巻 自然と人間の環境史』海青社、二〇一四年